

もの言う牧師のエッセー 第306

「桐生9秒98」

伊東浩司選手が出した男子100メートルの日本記録10秒00から19年、ついに出た9秒98。「10秒の壁」を破ったのはやはりこの男、桐生祥秀選手だった。10秒01の好タイムで脚光を浴び、17歳で「人生が変わった」2013年4月以来、走るたびに注目され、日本中の期待を一身に背負ってきたと言っても過言ではない。と同時に、世界では120人以上が超えた「壁」の厚さを、日本の人々が思い知らされた年月でもあった。

身長176センチ。“この世界”では小柄な彼の武器は、1秒間で最大5歩にも達する世界トップクラスの高速ピッチだ。短い接地時間でいかに推進力を得るかが鍵であり、膝を高く上げずに重心を移動させる“すり足”に近い走りだという。しかし、この1年余りで実力の拮抗する選手が続出。昨年のリオデジャネイロ五輪は日本勢で何とただ一人予選落ち。さらに日本選手権では4位に終わり、個人種目での世界選手権代表入りを逃し、直後は「走る気がしなかった。」

パワー不足を痛感し、アテネ五輪男子ハンマー投げ金メダリストの室伏広治氏に「大嫌いだった」という筋力強化の指導を願い出た。経験のなかったチューブを使ったトレーニングなども学び、「全身をうまく使えるようになり、軸がぶれなくなった」と土江寛裕コーチ。重圧や惨敗にくじけず自らを磨きここまで来た。 聖書には

「私はあなたの仰せの道を走ります。あなたが、私の心を広くしてくださるからです。」

詩篇119篇32節、

とあるが、これを歌っているのは、度重なる苦難を乗り越えてイスラエルの王となり、その後の人生も全身全霊をかけて信仰者の道を走り続けたダビデである。試練に耐え、継続するのみならず、結果が出ない時は、頑なになって心を閉じるのではなく、神の声に素直に耳を傾け、心を開いて学ぶ姿勢こそが栄光への道である。 2017-10-15

